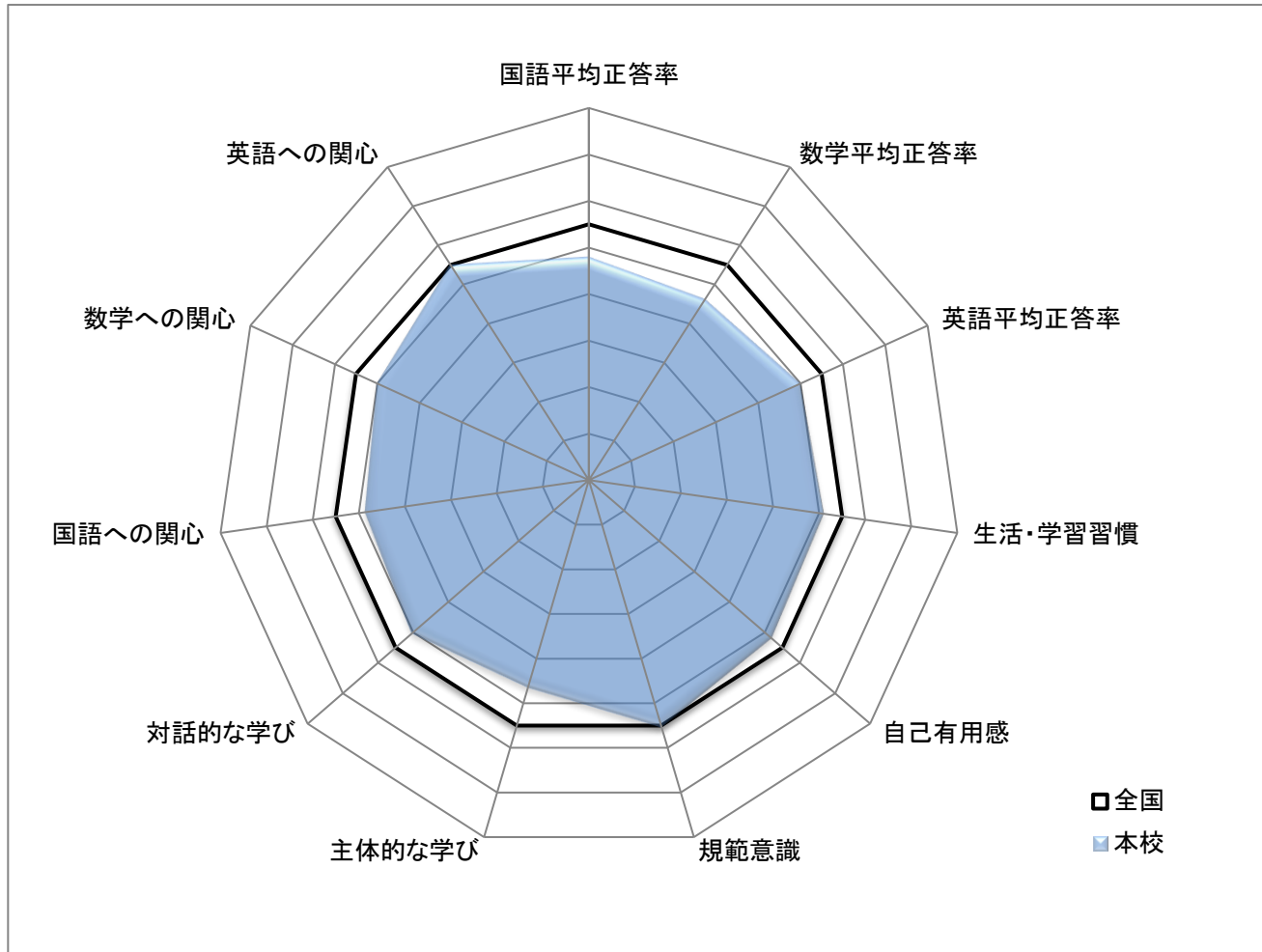


●各領域における、全国平均正答率及び、全国の肯定的回答合計値を基準とした場合の、本校の様子。



《現状把握》

昨年、一昨年と全国平均を上回っていた正答率が、今年度は大きく下がっている。  
 国語や数学への関心の低さ、主体的な学びに対する意識の低さが顕著であり、この点に大きな課題を抱えていると考えられる。また、家庭学習の習慣化にも課題がうかがえる。学びたくなる授業→家庭学習といったサイクルが停滞していると考えられる。  
 生徒の関心を喚起し、主体的に学んでいくスキーム作りが喫緊の課題である。

《授業改善のポイント》

基礎基本の定着を図る小テストの継続実施や家庭学習課題の設定は必須であるが、それと同時に「わかる、できる喜び」を感じられる授業の構築が大切である。ICTの活用により多様な授業の進め方が可能になってきている。しかし、生徒に何をどれくらい定着させたいのか、むしろわかりにくくなってはいないか。情報過多で理解が追いつかず、消化不良を起こしてはいないか。知的好奇心を刺激し、学ぶ楽しさを感じさせる授業の構築が求められている。主体的で対話的な学びを進めながら、重要な部分をきちんと抑えた授業構成を工夫していく必要がある。

《チャートの特徴》

英語への関心と規範意識を除き、多くの項目で全国平均を下回っている。  
 特に教科への関心のなさ、主体的学びの意識の低さが家庭学習習慣の確立に悪影響を与えていると考えられる。

《家庭・地域への働きかけ》

家庭学習の習慣化への協力、とくにミライシードの活用。また、放課後学習教室の利用状況が低調なので活用を呼びかけていく。